

東アジアにおける文字を中心とする文明の根源¹⁾

河 永 三

1. 東アジア文明の特色

本稿でいうところの「東アジア」とは、主に韓国・中国・日本及びベトナム等のことである。この「文明」とは、漢字利用に基づいて作り上げられた「文字中心」の文明を指している。そのためこれらの国家地区の文明を「漢字文化圏」とも呼ぶ。当然ながらここでのいう「文字中心（主義）文明」とは、ジャック・デリダ（Jacques Derrida、1930～2004）が提示した「ロゴス中心主義」（logos-centrism）と、対になる概念である。

東アジアの「文字中心文明」の漢字文化圏は、歴史上独特な思考方法と文化様式をもつ。いわゆる系統思维（体系的思考）²⁾・循環思维（循環的思考）³⁾・直感思维（直感的思考）⁴⁾・具象思维（表現的思考）⁵⁾・連続性発展模式（連続的發展モデル）⁶⁾等であり、それは西洋文明の分析思维（分析的思考）、直線思维（線形思考）、論理思维（論理的思考）、抽象思维（抽象的思考）、および突発性的發展模式（画期的な開発モデル）とは対照的である。

筆者は、これらの特色は漢字利用と密接に関わっており、切り離す


ことができないものと認識している。それゆえ、東アジアの文字中心文明の根源は漢字にあり、この文明のさまざまな特徴もまた主に使用された漢字と漢字の特徴によって導き出されたものである。本報告では、字源と文化的観点から解説して、漢字の「文」と「言」は、西洋の伝統的な「言葉」と「文字」に相当すること、つまり、東アジアの「文字」は、西方の「言語」に相当することを論証する。同時に、具体例を挙げて、西洋哲学の歴史で最も重要な「真実」の概念が漢字にどのように現れるか、それがどのように発展してきたのか、その概念は西洋のものとのように比較することができるのかを示すことによって、漢字が東アジア文明研究の根源であり鍵であることを論証する。

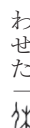
このことから、西洋のロゴス中心文明と東洋の文字中心文明は、決して異なるものではなく、本質的には同じものであり、したがって二つの大文明の間には、優劣や、文明と野蛮の別は存在しないということとを明らかにし、オリエンタリズムの誤りを正す具体的な方法論の一手を探る。漢字はまさに漢字文明の源をうかがう鍵であり、漢字文化圏の文明の根源を探し理解する「源」なのである。

2. 東アジアの「文字中心文明」の伝統

東アジア文明は漢字を基礎として発展してきた文明である。漢字はこの世界で最も代表的な表意文字であり、その文字自体が意義をもつ。つまり意義の中心には文字がある。人類の思想を表現する方法は、おおよそ言葉と文字の2つの方法に分けられる。言葉は聴覚体系に属し、文字は視覚体系に属する。文字体系はさらに2つのカテゴリに分類できる。つまり、音声のみを持つ文字と意味をもつ文字である。前者の最も代表的な文字体系は、すなわち英語や韓国語・日本語の表音文字であり、後者の最も代表的な文字体系は漢字である。もちろん表音文字より前には、メソポタミアの楔形文字やエジプトのヒエログリフがあり、これらは当初は表意文字であったが、その後、意味を表す機能は徐々に失われ、ただ音声のみを留めるようになった。

漢字は、具体的なイメージと抽象的な意義の組み合わせによって概念を表現する。今日まで用いられている漢字は、中国人に独自の文化を形成させた。漢字が重点を置くものは、直観であって論理ではなく、また形象であって抽象ではない。さらに全体であって分析ではなく、循環思考であって線形思考ではない。このような特色は終始途切れることなく連綿と続いている。

たとえば、古代中国人が「 (止)」を見たとき、直感的にこれは「足」であると考え、歩みを止めることによって「停止」と連想する。歩みを止めることから、さらに停止する前と停止する後だけではなく、突き進んでいく動作「走」に思い至る。このように「走」

と「停」は、ふたつの対立概念ではあるけれども、矛盾しつつも互いに接続し、全体としては矛盾する関係ではなく、さらには同一概念とみなせる。このような考え方は、中国人に、乱雑に絹糸が絡まった「乱」字を通して「治理」を考えさせ、落葉する「落」字を通して「新しい始まり」を連想させる。中国の訓詁学でいうところの「反訓」はこの典型例といえよう。またもし中国人が立っている「人」と「木」を合わせた「 (休)」字を見た時、「木のような感覚のない人」或いは「人のように成長する木」とは考えず、「人が大樹の傍で休む」情景を思い描き、「休息」に思い至る。そして「休息は喜ばしいこと」から「めでたいこと、喜ばしいこと」と派生させる。

漢字の表意方法はこのように直感的・具体的・全体的・循環的なものであり、上記の東アジア文明の思考の特徴は、すべて漢字の長期使用に由来する。したがって、漢字は中国と中国文明を理解するための根源であり、核心要素でもある。中国人は漢字を根幹として、自らの文明を築き、さらには周辺の韓国と日本に根付き、そしてベトナムでも漢字を借用して記録し、中国文明に似た文化世界を作成したため、これらの地域は「漢字文化圏」を形成した。

漢字の属性によって、中国人は「言葉」よりも「文字」に関心を持ち、文字を中心に文字の本質とそれに関連する特性も研究し、さらに文字こそが真実の概念を表現できるとさえ考えており、文字は言葉の前にあるのである。このような文明の特色は、西洋の「ロゴス中心主義」の概念と対応しており、「文字中心主義」文明と称することができ、が、ロゴス中心主義は「言葉」が「文字」よりも優位にあるとされ

る。

もちろん、「文字」の中の「文」の概念は「これ以上細分化できない基礎的な字」であって、「字」の概念は「2つの要素から成る、分割可能な合わせ字」であり、後にこれら2つ字が組み合わされて「文字」という語が形成される。ただし、この言葉の中の「文」は依然として核心字でもある。

3. 漢字、東洋文明の源：「真理」を例として⁽⁴⁾

(1) ヘーゲルの中国に対する批判

13世紀末のマルコ・ポーロ (Marco Polo, 1254 ~ 1324) の東方旅行は、西洋の15世紀の大航海時代を開き、ここに西洋の東洋に対する注目が急激に高まった。これを契機として、西洋は東洋、特に中国についての研究を始める。そのなかで19世紀初頭のヘーゲル (G. W. F. Hegel, 1770 ~ 1831) の中国に関する研究は、西洋において特殊な地位をもっている。彼は中国にとっても関心をもっており、多くの関連研究を残している。彼の研究は西洋の中国に対する認識に多大な影響を与え、さらに破壊不可能な輪郭を形成した。彼の結論は「中国には歴史も哲学もない」というものだった。⁽⁵⁾

これは極めて衝撃的な主張である。彼は、中国には王朝交代と興亡盛衰はあったが、ただ単に王朝が交代しただけであり、真の歴史的变化を実現することはなく、さらにはそれに付随して生じる発展もなかったと述べた。人類の歴史は、少年期・青年期・壮年期・老年期に分けられ、文明の始まりのメソポタミア時代は少年期、ギリシア時代

は活気が漲る青年期、ローマ時代は壮年期、そしてゲルマン族が活躍する時代はまさに理性が成熟する老年期とされる。

では、中国はどの段階に属するのか？ 彼は、西洋文明のはじまりのメソポタミア時代にすら及ばず、「幼児期」にもまだ達していないと考えた。そして、当時の中国は理性と自由の太陽がなく、原始的・自然的な蒙昧期をまだ脱していない段階であると指摘した。さらに、国家は一つの巨大な「家族」であり、「個人」はただ道徳に従って生活を律する「大家族」の中の「子供」であり、独立した人格ではなかった。したがって、中国は個人の自由意志・理想・精神のない、「王国」とされた。⁽⁶⁾

彼は、理想 (idea) が研究されないとそこには科学がなく、理性に関する議論がないままでは真理に関する研究がおこなわれることがなく、真理の概念がないところには哲学が存在することはないと考えた。この結論が出されるや、それは大きな影響と後遺症をもたらし、我々ももちろん、ヘーゲルの影響を排除できない。

最も代表的なものは、中国の真理の概念は「真」という字に表されている。この字が最初に現れるのは漢代であり、しかもこの字がもつ真理の意義は仏教伝来の後に降るとさえ考えている学者が近年でもなおいる。⁽⁷⁾ まさか中国思想は、ただ道徳常識だけがあって、思弁思惟が存在しないというのだろうか？ たゞ思弁がなくとも、よもや文明と野蛮を測ることが唯一の尺度だともいうのだろうか？ これが偏見ではないと言いきれないが、ただ他人を測るのに自分自身の歴史に基づいているのであり、自分だけが文明化されており、他人はみな野

蛮であるという。これは極めて西洋中心主義 (Orientalism) 的な考え方というえよう。当然ながら、この種の思想は現代では既に大幅に修正されているが、細かなところでは依然として西洋風の偏見と誤解が残っている。著者は、漢字がこのような偏見を正す最も重要な道筋であり、最も効果的な方法の一つであると考える。そのため、この後、「真理」という漢字について言及しつつ、漢字の中国文明研究における重要性について見ていきたい。

(2) 「真」字は漢代になってようやく出現したのか？

「真」字は本当に漢代になって登場したのだろうか？ 西洋の真理の概念は本当に仏教伝来以降の中国にもあったのだろうか？ それ以前に、中国には真理の概念が存在しなかったのだろうか？ それほど遅くに現れたのだろうか？ 中国には本当に哲学が存在しなかったのだろうか？

西洋の学者たちの認識は至極真当なようにみえる。「真」字は、漢代の『説文解字』に最初期の解釈があるが、ここでは「真」字に「真理」という意はなく、「真正」等の抽象的な意味をもつ。中国への仏教伝来以後、「真」字は「真諦」の語釈を擁するようになる。これらはすべて事実である。しかし、彼らはひとつ重要な点をおろそかにした。つまり、「真」字が生み出されたのはこの時代よりもはるかに早く、すでに西周金文に現れている。それだけでなく、早くも甲骨文の時代にも既に存在しており、この字の原形は「貞」字であった。さらにつけ加えるならば、中国文明は西洋の文化体系とは異なるため、中国の

「真実」も西洋とは異なる形で存在している。

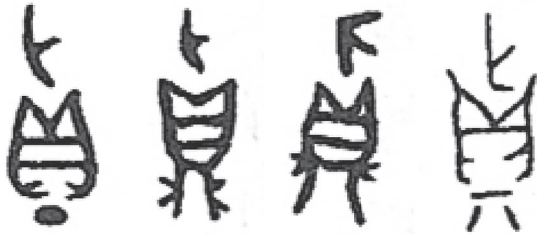
許慎が編纂した『説文解字』は、中国だけでなく、人類史上においても偉大な著作である。西暦 1100 年に成った『説文解字』は、その頃見ることができた 3333 個の漢字 (最近復元された資料によると 3833 字⁸⁾) を収録し、さらに字形、来源、意義および意義の派生、読音等の一つ一つ注釈を加えている、大部な字書である。約 1000 年前に、このような大部で体系的な字書が編纂されたことは、驚くには値しない。

しかし、『説文解字』における「真」字の解釈は、非常に曖昧で、理解し難い。

真。仙人の変形して天に登るなり。匕と目としに从ふ。一は、之に乗載する所以なり。𠄎は古文の真。『説文解字』卷八、七部

許慎は「真」字を「化」(匕・化の源字)と「目」、「匕」と「一」等 4 つの部分に分解して解釈をおこなっているが、神仙が昇天する情景を叙述しており、そこには道教の痕跡がはっきりと見てとれる。ただし、許慎の 4 つの部分への解釈は、いささか複雑で、当時の字形や意義とはあまり一致してない。あるいは「真」の字形の変化が複雑すぎたのかもしれない。偉大なる許慎といえど、当時の状況では解決できない謎も多く、「真」の字形の変遷過程もそのひとつだったのだろう。「真」字の解釈の曖昧さは、段玉裁に至るまで、許慎の示したものが抜け出すことはできなかった。

幸いにも 20 世紀後半に、春秋戦国時代の文物が大量に出土しており、我々は青銅器の銘文に蜘蛛の糸を探し出すことができる。以下の図に



金文中の「真」の各種字形
（『伯真甗』・『季真鬲』・『段簋』・『真盤』（『金文編』）、
『古文字詁林』に引用されているものを転載）

示すように、「真」字は決して許慎がいうような4つの部分ではなく、「化（匕）」と「鼎」で構成されている。時に、「鼎」字は「貝」と表記される場合があり、字音を表す「丁」を加えることがあり、「鼎」の下部が「其（丁）」の形に変化することもある。どのように変化しても、それは「化」と「鼎」から成り、これに基づいて変形していることは明らかである。さまざまに字形が変化しても、我々は「真」字甲骨文における「真」であると確信している。つまり、「真」は「真」字から分化したものである⁽¹⁰⁾。

(3) 「真」と「貞」は同源のもの

「貞」という字は甲骨文では非常に重要である。現在は「卜」と「貝」とで構成されているが、当時は「卜」と「鼎」とで構成され、「鼎」と書かれていた。その後、「鼎」が簡略化され、今日の「貝」に変化して「貞」字となった。「貞」の一部である「卜」は、古代の占いの時に火で炙って亀裂が生じた亀甲を表しており、こうした亀裂を卦辞の根拠とすることから「卜」には占いの意味合いがある。

当時、「貞」は「真」に通じ、共に神に伺いを立てる意味があった。この字が生まれた背景は、神権統治が形成されたばかりの殷商期による。『説文解字』では「貞」字を「問である」と解説しているが、漢代の偉大な経学家 鄭玄も「貞は問なり。国に大なる疑い有れば、耆龜に問ふ」と説いた。亀の甲羅によって占いを行うことで、国家の重大事を神に問い、亀甲の亀裂痕を通して神の託宣を解釈した。当時、この種の職業に従事した人を「貞人」と呼んだ。「貞人」は聖職・世襲で、時に王がみずから行うこともあった。それほど「貞人」は、当時、非常に神聖でまたとても重要な職業だった。現在ではすでに当時の意味合いは失われているが、わずかに「直」と「正直」という意味だけが残っている。このうち、「直」は亀の甲羅を火で炙ってきた直線の割れ目に由来するものと考えられる。「正直」の方は「神の託宣を正確に理解することができる」ということから派生したものである。

こうしてみると、「真」の字源と真理のルーツは「貞」の字より探り当てることができる。「貞」は占卜の行為を指し、「貞」はまた「正」

を意味する。つまり事後の結果から占卜が正確で信頼できることを示し、ここから正確という意味を得たのである。くわえて「鼎」と「貞」の字も通用する。共に神に問う意味を持ち、占卜儀式のシンボルとなっている。「鼎」が儀式的な器物であるがゆえに、「鼎」を利用してこの意味合いを強調している。このほか、「占卜」の意味合いを強調するために「卜」字を加え、「鼎」に変化したのである⁽¹⁾。

「天に問ふ」行為を「貞」と呼び、問天の儀式を司る人を「貞人」と呼ぶ。両者は「真」の字源である⁽²⁾。すなわち「貞」のルーツは占卜であり、占卜は祭儀によって完成されなければならない、この祭儀を代表することができる祭器が「鼎」である。このことから「貞」は占卜の意味を持ち、同時にまた祭祀を司る祭師の長を指す。占卜官は祭祀の長であると同時に問天の祝詞を誦する。たとえば、大干ばつの際、占卜官は祖先神の霊に向かって「雨はいつ来るのか？」と問うことができる。天・地・自然は亀の甲羅によって、時に器物によって体現される。つまり、占卜官は天神・地神・祖先神を注視して、神々のお告げに耳を傾ける聴き手なのである。

今日では占い師といえは迷信の代名詞で、近代に入ってから占術と科学の距離は一段と遠のいたが、殷商時代は神権政治であり、貞人はその聖職者・知識階層であった。しかも、貞人の中でも最高位にあったのが王である。彼らは神の御心を伺うために占卜を行い、亀裂の入った甲羅の痕を通じて「神の隠れた意思」を窺った。彼ら貞人は神と人の仲介者だった。古代中国人は隠蔽された世界を発見する過程が真理であると考えた⁽³⁾。もしプラトンが真理の認識のために「理念 (idea)」を想定して人びとに伝えなかったならば、真理は「非隠蔽 (aletheia)」の方法によって、この世界と私たちとに相対し、そしてこの方法は我々がこの世界を解説しようとする行為の中にも現れていただろう。

実際は伝承を聴くことで、過去より未来を見たり、未来の立場から過去を呼び起こしたりしている。これは同時に過去の時空と未来にあたる現在の時空とを融合して一体とする行為である。世界は幾重もの謎に包まれているが、これは占卜官が謙虚に世界を謎に満ちた世界であることを願って、進んで人々に眼前の真実だけを見えるようにしていたのである。



「真」と「貞」の各種古代字形

過去を原始もしくは野蛮と見なしたり、あるいは現在を過去の発展と見なそうとする観点は、西洋の発展概念を根拠とした時間空洞の複製である。過去を呼び起こすことは幼児期への回帰ではなく、謙虚に神に願う行為であって、まだ解明されていない真実を神に願うことである。

(4) 中国の「真理」の真相

中国の神は西洋の上帝エホバと同じで、野放図な存在ではない。神霊とはいつでも、人類と同様に周りを見回して、気を配る必要がある。⁽¹⁾ 占卜官もまた、卜辞を恣意的に解釈して、ほしのままに他人を支配することできない。古代社会では、たとえ強権を行使できたとしても、その権力は、他者、自然、万物から生じているもので、決して自らが生み出したものではなかった。

占卜官の占卜官たる所以は、物事に対して神に問いただす資格を有しているからであり、物事の内情を洞察し、裁決できるからではない。したがって常に占卜官が「雨が降るのか否か？」と尋ねていたのは、「真」が祭祀の長の意を有しているからである。また同時に（固定された一つの意味だけをもちではなく、多くの流動的な意味を含む）満ち足りるや、多くのといった意もあり、そこから派生して（非常に大きく目を見開いて観察するという意味もあった。祭祀の長には、多種多様な卜辞の予言にあつて、整理された一貫した答えを出して判断を下すことが求められる。それに伴って祭祀の長も判断の不確実性に苦しまなければならない。

もちろん、この役割は王権が強化された後、次第に力を失っていった。王権は不確実性を最大限に減らすことで、王は裁定者および命令者として、絶えず自己の王権の地位を強固なものにして、こうとした。しかし、殷商時代の王は占卜を通して権力を行使したという一点において、後の皇帝の地位とは明らかに異なる。

古代中国人は、簡単な占いによって判断することを「真理」とは考えなかった。彼らは「真」と「偽」の二分法を基に、虚偽でない部分を抽出して真理を判断するのではなく、問いそれ自体、多様で複雑な現象を観察すること、神の見えざる意思を求めることを、真理の道に通じるとした。つまり、古代中国は西洋とは異なり、真理は固定不変の特定概念ではなく、神に問う行為を真理に通じる道と見なそうとしたのである。あるいは中国の真理概念はこの道より派生して出てきたのだろうか？ここでは、この件についてとても慎重に考えてみたい。

(5) 真理とはいったい何か？

一般的に、我々は真理とは自明的で、普遍的であると考える。けれども、我々はこのような常識に反して、「真理とは何か」という問いに向かい合わねばならない。真理とは目に見えないものだろうか？真理とは、時間、場所、人によって変わるのだろうか？真理は明確に自明なものなのか？このように問うとき、真理ほど我々を悩ませるものはない。

真理に関して、西洋の学者の意見はすべて同じというわけではない。真理は状態と認知の一致であると考える者もいれば、相対主義的な真

理観を主張する者もあり、真理は目に見えるものではないと考える者もいる。ただし、西洋の多くの考え方の中で最も伝統的なのは真理観を論ずるもので、すなわち観念あるいは陳述の真偽はそれが事実に対応しているかどうかにある。西洋の主な哲学史では、真理と事実に対応するもの、つまり真理とは言語表象の正確さである。「けだし在るものを在らずと言ひ、あるいは在らざるものを在りと言ひは誤りであり、これに反して、在るものを在りと言ひ、在らざるものを在らずと言ひのは真である。」(To say of what is that it is not, or of what is not that it is, is false, while to say of what is that it is, and of what is not that it is not, is true.)¹⁵⁾これはアリストテレス (Aristotle, B.C.384 ~ B.C.322) のモデルであるが、これは真理観を論じたもののなかで最も歴史的な定義の一つである。

真理はラテン語の「Veritas」が語源であり、正しき、真正き、確実さを意味する。アリストテレスによると、真理は判断と状態の完全な一致であり、プラトンの理論によれば、真理と理念 (Idea) は対応するものである。中世のローマを経験して近代に至ると、ジョン・サール (J. R. Searle, 1932 ~) は、「陳述と事物の実際の存在状態が一致していることが真である」¹⁶⁾のために、真理は客観的で、固定的であると考えた。したがって、中世以降、西洋の近代の主な哲学では、真理は真理と仮相、真と偽の二分法に基づいて解釈されるものだった。科学の発展により、真理の概念はますます緻密で正確になり、現象や内部への探求ではなく、現象の認知の分析が正しいかどうかとなった。

真理は西洋哲学の最終目標であり、学問的探求の宿命的な命題であ

り、これこそが知識の殿堂である大学の教壇にいつも「Veritas」が登場する理由である。ハーバード大学、イエール大学、ソウル大学の校章には「Veritas」が描かれている。しかし、古代中国では、真理は「真理／仮相」という二分法によって解釈するのではなく、陳述と事実の「一致／不一致」という論理的分析を行うのでもなく、真理を正確な言語で表現することが求められた。東洋の世界ではどのように真理を認識したのだろうか？『道德経』第一章の「道可道、非常道。(道の道とすべきは、常の道に非ず)」という句が端的に表している。

西洋はローマ時代から少し遡り、ギリシャ語の「真理」の語源には、東洋と大きな違いはないことが見てとれる。真理のギリシア語の語源は「aletheia」で、「Veritas」とはむしろ区別されている。「aletheia」という語は「a」と「letheia」で構成され、「a」はその背後にある言葉を排除する、つまり否定することを意味し、一方「letheia」は「隠す／隠れる」という意味をもつ。そのため「aletheia」は「letheia (隠す)ことを否定する」ことであり、すなわち人目に触れないように秘匿したものを顕わし、非隠蔽・非隠蔽 (Unverborgenheit, unconcealment)¹⁷⁾することである。しかし、「Veritas」が探求するのは、「陳述と事実が一致するか否かである。「aletheia」が重視する点は、真理自体が自明で、一致していることであり、自明な表象の背後に隠されたある種の意義を明らかにすることにある。

ギリシアとローマの神話においては、真理の名称だけが異なり、それらの意味合いは同じものである。一般的に真理は女神によって表される。サンドロ・ボッティチェリ (S. Botticelli) 等の真理を題材とし

た多くの名画は、すべて裸体の女神でもって表現している¹⁸⁾。想像上の再現ではあるが、下図で表現されている真理は覆い隠されており、あるいは我々が対面したくないような真相であったり、あるいは背負いきれないような真相であったりする。それは真理が神聖であったり、それは真理が神聖であることが原因であったり、私たちに陰部を露出して全裸になったようなことであったり、我々の理解の範疇を超越することが原因であったのかもしれない。

言い換えると、真理は正解と誤りを追求することではなく、深層に隠された根源を探求することであり、だからこそギリシア語では「aletheia」が用いられた。近代において西洋では「Veritas」によって自明の真理を探求したが、それはポストモダン思想期に入ってから中国と東洋を思考するようになったことを表しており、ポストモダン思想以後の構造主義によって次第に減退したことが発端となった。ホーン・ソーシー (Horn Saussy, 1960) とカヴァフィス (C. P. Cavafy, 1863 ~ 1933) のポストモダン思想は「中国が世界に編入された後に、発生しはじめた事だ」と主張している。デリダ、フーコー、バルテス、ラカン、ジュリア・クリステヴァたちの中国に関する研究も同様で、彼らの哲学にもそのことが現れている¹⁹⁾。

東洋の真理の概念を理解したいならば、真理の「真」字について研究するだけではなく、「道」字についても研究せねばならないだろう。今回は真理の「真」の字源を重点的に考察したので、「道」字については機会を改めて論じたい。次節では「真」と真の古字である「貞」を中心に、その深妙を考察してみたい。

(6) 以後の変化

漢代の『説文解字』に最も早い「真」の解釈があるが、「真」字は実際には周代にはすでに現れており、さらに遡及すれば、早くも甲骨文中に存在し、「貞」がその源字である。「貞」ははじめ占卜、すなわち亀甲で占いを行う「問神」によって、「神の目に見えない意志を顕わす」行為だった。

ただ戦国時代末期から漢代の初めにかけて神仙思想が普及したことによって、宇宙の万物の原理を理解している人物を「真人」と称するようになる。この過程において「貞」と「真」は明確に分化して、貞は「直」と「正直」という意味をもつようになり、そこから派生した「真」から「真人」がつくられた。その後、仏教が伝来して、「真」字にさらに「真理」の概念が加えられて、今日に至る。

上述したように、中国において「真」字は『説文解字』よりも以前からあり、かつその出現は非常に早く、甲骨文の「貞」にまで遡り得る。「真」の原型となった「貞」は、ギリシア語の「真理 (alētheia)」、つまり「排除する (a)」と「隠す (letheia)」の合字と、異なるところはない。

環境が異なるため、中国と西洋の発展経緯も明らかに異なる。言い換えると、西洋人は識別できる概念こそが存在することであると考えるが、漢代以前の中国人にとつての真理とは執行することであり、言葉を用いて書き記すものではない。したがって、彼らは西洋人のように「真実とは何か?」という問題を呈することはできず、「做、執行 (ding)」を重視するか、正しい行ないに通じる方法にこそ注意を払っ

た。中国人にとっては、真理とは主体と客体、人類と世界という二法
法的な関係のなかで認識するものではなく、「専一的（一者関係）」の中（*the relation of the one in united relationship*）にあるものなのである。
この伝統的な考え方は、論理学や認識論によってではなく、直観によっ
て理解されている。

それは論理的な真理がないという不存在（虚無）ではなく、東洋で
はただ言語学の観点から真理を思考することがなかっただけである。
東洋は歴史と人類学の体系から概念を分離してこず、つねに「物質の
中に理性があり、理性の中に物質が包含されている」という考えをもっ
ていた。つまり西洋は分析哲学を導き手とし、東洋のそれは解析学で
あった。

思考の方向性が異なれば、漢字には西洋の思考に対応する要素を見
付けることは難しく、西洋の「真理」の中国語翻訳語彙から対応する
漢字を探しても、それは東洋の「真理」を研究する方法にはなりえな
い。英語には関連する代名詞があるが、漢語では関連する形態素（造
語成分）が必須となるのだが、これによる判断は正しいものではなく、
オリエンタリズム的文化差別と大差ない。

4. 「文」と「言」の関係…文字中心文明の根拠²⁰

ヨーロッパで「言語」は、人間の理性の至高のシンボルであり、「真
理」を追求する最も重要な手段だが、東洋でそれに対応するものは「言」
ではなく「文」でなければならぬ。そして、時間の経過や空間の変
化と共に発生・変質するという西洋論における「文字」も、我々東洋









の「文」ではなく「言」でなくてはならない。

西洋では、言語は「*logos*」であり、真理である。これに対応するの
は中国の「文字」概念、「文」である。これらは人類の靈魂とつながっ
ており、靈魂を伝達することができるため、文明の核心となる。言い
換えれば、「（音声）言語中心主義」と「文字中心主義」は、根本的に
異なるものではなく、両者の本質は同じであり、ただその呼称が違う
だけである。

（1）「文」は「文字」を指すか？

「文」といえばすぐに西洋の「文字」を連想するが、「言」と対応す
るのが「言語」というのは、果たして本当だろうか？

中国における「文」は、どの概念よりも重要な漢字で、「人文・天文・
文学・文化・文明・文芸」など、たくさんの重要な語を構成している。
なぜ「文」という字は、かくも多くの崇高な概念を持つ語を形成でき
るのであるのか？

最初の字典『説文解字』中の「文」は、「画を錯^{まち}はらしむなり。交
と文とを象る」と解釈されており、交叉することが本義となっている。
しかし、甲骨文によれば、「文」は「紋身（入れ墨）」と推定されてい
る（第一期、京津 2837；第一期、乙 6820 反；第一期、
后下 14.13；第五期、甲 3910；第五期、粹 361；先周、
周甲³¹）。外側の「」は人を、内側の「×・∨・∧・」などの
符合は胸に描かれた入れ墨を意味している。人体に描かれた入れ墨は、
「文」に含まれた最初の原義である。

では、どうして入れ墨をいれるのだろうか？多くの文献と人類学の資料分析によれば、この種の入墨は自然死した人体に刻まれた紋様であり、上掲の甲骨文中の各種字形は、靈魂と肉体とを分離するために、死体に刀痕を刻む、流血の儀式でもある。

古代では、死は靈魂と肉体との分離過程にあり、両者の分離は必ず流血によって完遂されなければならないと考えられていた。原始狩猟期における死因の多くは、事故もしくは野獣の襲撃による出血死で、自然死は非常に稀であった。自然死に対し、彼らには入れ墨の儀式によって身体を流血させることで、靈魂と肉体の分離を実現したのである。時には紅色の染料を身体に塗ったり、紅く染めた泥土を死体の周囲にまいたりした。甲骨文の「死」の異体字がこのような痕跡を留めている。²²

このように「文」は靈魂と肉体を分離する流血の儀式、「刀痕（入れ墨）」から始まった。刀痕より「紋様」の意味が生まれ、後に「文字・文章・文学・人文」等の意味が出現し、近代になってまた「文化」や「文明」の意味が現れた。その変遷過程で、本義である「紋様」の「文」字に絹布の「糸」が加わって、「紋」字が分化したのは、絹織物の紋様が最も代表的だったからである。

したがって次のような結論が得られる。「文」は鞘から出るための一種の門であり、その意味は人の靈魂と関わりがある。「文」という字は単に紋様を意味するだけでなく、精神と肉体の架け橋となり、人類精神の軌跡をも含んでいる。したがって、「人文」は人類が持つ精神領域の文化を包括し、「文学」が「人類学」を意味して、「思想や感

情の行為を言語で表現するのに用いられる」"literature"を意味せず、同時に「文人」もまた「文学者」を意味しない。「文化」も最初は"civilization"の意味ではなく、「人文精神」によって世界をより良い方向に行かせる」ことであった。これにより、「文」は中国で精神的な意味を持ち、その意味は「文章」・「文飾」・「文心」を遙かに超越して、その本源的な意味は「人文」にあった。

(2)「言」は言語と等しいか？

「文字」と「文」の場合と同様、西洋で言うところの「言語」に対応する漢字は、果たして本当に「言」なのだろうか？「言」は一体何を表しているのか？また何を象徴しているのだろうか？

残念ながら、「言」(𠄎)第一期、甲499:𠄎第一期、拾81；
𠄎第二期、京津3611；𠄎第四期、乙766)は「音・舌」等の漢字と字形・字義に緊密な関連が認められ、常用される字であるにも関わらず、却ってその字源ははっきりしていない。

『説文解字』もまたただ「直言を『言』と曰ひ、論難を『語』と曰ふ。口に従ふ、辛の声」と触れるだけで、「言」の字源にまだ言及していないのが悔やまれる。宋代の鄭樵は「言」を「舌」であると叙述する。甲骨文の出土後になっても、徐中舒は鄭樵の説を支持し、郭沫若・徐中舒・許進雄らは「言」の字は洞簫・笙簧・喇叭・鐘といった楽器であると考えている。日本の白川静は神との約定に背いた罰を受ける時の道具であり、刃物と、刃物を納める道具としている。²³

もっとも、字形から推定すると、「言」(𠄎)は「辛」または「辛

〔V〕と「口」によって構成され、この「辛」または「辛」は竹で作った笛、その上端部分は拡声筒を、下端部分は笛または洞簫のリード (Reed) を表している。また両側に突出している筆画は小枝である。

「言」の原義は竹製の「洞簫」であり、その後、人間の声を指すようになつたが、本義を指す時は「言」の上に「竹」を加えて「管(大簫)」に分化するようになった。このようにして見ると、「言」は楽器の音より起こっており、つまりは物の音であつて人の発する声ではなく、人の靈魂とは全く無関係で、単なる物体の音声にすぎない。したがつて、漢字の中でも「言」を元素とする字は、「譎・訛」等の字が「いつわり」を表し、「變(変)」が「変化」を表し、「誘」が「誘惑」を表し、「詐」が「あざむく」ことを表し、「誑」が「荒唐(でたらめ)」を表し、「諛」が「阿諛奉承(媚び諂う)」ことを表し、「誇」が「誇張」を表し、「詛」が「呪詛」を表し、「誹」が「誹謗」を表すといったように、すべて否定的な意味を含んでいる。²¹⁾

以上の字源より見ると、「言」と西洋の「言語 (langue)」は概念を異にし、人の至高の理性を代表せず、時間と空間の変化と共に変化して、本来の状態を維持できない、一種的可変性を示している。言い換へれば、漢字の「言」は靈魂の本性に對する洞察ではなく、事物の可変性を表現している。つまり「言」とは信用のおけない「音声」であつて、このような「言」が、靈魂が内包する知恵を傳達することはない。ただ器具に依存して音声を発生させているにすぎず、単なる媒介物であつて知恵の実体を有しない。

(3) 西洋の「音声」と中国の「文字」

対照的に、西洋人は言語は文字よりも重要であるとみなしてきた。聖書の最初の句は、「世界は初めに言があつた……」であり、「言語」が真理を伝える唯一の媒体であるという。プラトン (Plato, B.C. 427 ~ B.C. 347) は、「音声によって表現された言語は文字よりも言語の真実に近い」とし、文字を取り除く対象であると考えた。向かい合つての直接対話に偽りはなく、文字記録は伝達過程で偽造・改変される可能性があるため、文字は取り除かれる対象であり、言語こそが真理であるとされた。したがつて、「ロゴス (logos)」には「言語」と「真理」の両方の意味を含み、同時に「理性」の意味ももつ。彼は言語は魂 (プシュケー) に満ちていると考えたため、「真理」は「理性 (ヌース)」によって認識されるもの」という考えの起点となつた。

言語には文字よりも優れた特権があり、ヨーロッパが近代に入った後、音声中心主義が発展して西洋が支配する世界の優劣を論ずる理論となつた。ジャン・ジャック・ルソー (Jean Jacques Rousseau, 1712 ~ 1778) は、「符号を用いて言葉や命題を表す方法は野蛮な民族に適している、表音文字を用いるの方法は文明的な民族に適している」と指摘しており、ヘーゲル (Georg W. F. Hegel) もかつて、「表音文字は自由自在に用いることができより智慧のある文字であると断言した。現代言語学の父であるソシュール (Ferdinand de Saussure, 1857年 ~ 1923年) もこの理論的伝統を継続した。彼は、文字と言語に内在する組織に関係なく、言語は言語の観点から研究し、文字を排除するものとしている。また同時に、文字は言語を記録する符号と定義し

た。

ソシュールの理論は、科学の論理的思考を通じて体系的な言語学理論を構築したもので、それはヨーロッパにおける中国学に深い影響を与えただけではなかった。魯迅や銭玄同といった学者も「野蛮な」漢字の放棄を主張して、「中国の衰退を止める根本的な方法は……漢字を放棄することである」、「漢字は象形文字の末端であり、文字を覚えたり書くには手間がかかり……そのような文字は当然その命運を断たれねばならない」、「漢字を排除してこそ中国の未来がある」と述べている。これらの主張は、当時の先進的な知識人達の認識を表している。

これらの先進的な知識人たちの意見に基づいて、1949年に新たに建国された新中国は、「漢字をアルファベット文字に置き換える」という議題に大胆に取り組んだ。新中国の設立から数か月もせずに、文字改革委員会が早くも設立され、移行期間用に、漢字の筆画の大幅な削減を企画した、簡体字の第一組・第二組の方案が頒布された。同時に漢字に替わる漢語拼音^{ピンイン}方案を公布し、そして漢字と拼音を併用する方策を採択した。

漢字ははたして本当に破棄すべき対象なのだろうか？ 拼音字母は本当に漢字に置き換えることができるのか？ 拼音字母と漢字は同じ土台で論ずべき概念なのか？ 帝国主義による数千年の侵略を経験した旧中国は一瞬で瓦解し、伝統的な旧中国は中国を救いきれず、国家危急の時にマルクス主義の理論に導かれた革命政府は概ね正しいとみなしたため、毛沢東の政府は積極的にその方案を推進した。

しかし、鄧小平の改革開放を通じて「中国」は自信を回復し、1986

年には漢字を排除する方案を停止する。21世紀になると、もう一度奮起した中国は、漢字を世界で最も美しい文字にしようとしている。新時代には「未来の文字は漢字だ」という新たな主張を公にし、かつて激しく批判した孔子をいま一度華麗に「誕生」させた。漢字と伝統に関する事情はあまり簡単とはいえない。

名称は異なるものの、本質的に表している実体は同じものであり、したがって優劣など存在するはずがなく、文明と野蛮の別も存在しない。無論、西洋が「音声」によるアルファベットを重視し、東洋が表意文字の漢字を重視しようとも、両者の歴史は同じものである。したがって、アルファベットは漢字よりも優れているという愚かな見解は誤りであり、それはただ文明の違いや発展過程における環境の違いに過ぎないだけである。

遺憾なことに、20世紀の中国は、漢字を排除して表意文字を追求する道をひた走り、一度は放棄せんとし、さらには最も中国的で、人類にとって最も素晴らしい伝統を断ち切ろうとさえした。これは本当に大いなる誤解と誤りであったが、幸いなことに20世紀末にこの誤りは糾されることとなった。

私たちは、漢字とハングルが共存する特殊な文字環境に暮らしている。私たちの祖先は表意文字の漢字を使用した後、15世紀に表音文字のハングルを発明した。そして20世紀以降になって、韓国はハングルを中心とした文字生活をするようになった。しかしながら、どのように変化しようとも、その中核は依然として漢字であり、ただ我々の一部の者が頑なに漢字は外来の文字であるときなし、甚だしくは漢字を

放棄したがっている。

結局のところ、漢字は廃棄すべきかものか、それとも有効利用されるべき文化財産なのか？これはまさに我々が真剣な考えなければならぬ問題である。特に、第四次工業革命が到来している今日、拼音文字（한글、ハングル、諺文）を使用する人びとがますます増えている韓国民族にとっては、もし2つの文字体系を使用し、両方の文明の利点を活用できるならば、すなわち表音文字と漢字に代表される表意文字を兼ね合わせられれば、2つの文化的利点、つまり東洋と西洋の文化的利点を合わせ持つ、未来型の民族に発展することもできるだろう。

5. 漢字は東亜文明の根源

如上の「真理」に関する考察からも分かるように、漢字には文化性と哲学性が見て取れる。もし、西洋哲学が東洋に流入した時に、西洋の真理観が主導的な地位を占めたという事実を、我々が認識していれば、理論と字源の角度より西洋の観点を反駁することができたであろう。つまり、「真」という文字が『説文解字』に出現する時点で、中国に真理の概念が存在したかどうか、あるいは「真実と虚偽」の有無によって、中国に真理の概念が存在したかどうかを判断するといった視点によってである。そこで文字学の角度から「真」字を分析し、「真」字が分化する前の存在形式と、真理の表現形式に目を向け、同時に「隠れた」過程を探ることによって真理の源をたずねた。

上述の「真理」のほかにも、類例として、たとえば公と私、法と則、

美と醜、道と徳、中（央）と辺（境）、善と悪、礼と楽、毒と菜、常と変、詩・和・福・情・易など様々な観念語があつて枚挙に暇がない。西洋哲学の資源より、東洋人固有の考え方や価値観を窺うことができるのである。

漢字は東方文明の中心であり、哲学や文学が出現する以前からその根源となる意義を形成し、甚だしきは文字が形成される前の豊富な記憶をもすでに蓄積している。つまり、漢字字源の研究は、東方文明の源についての研究といえよう。

くわえて東方文明は漢字によって基礎をなす。もし、デリダが西洋文明を「音声中心主義文明」もしくは「ロゴス中心主義文明」と呼ぶならば、東洋文明はロゴス中心主義文明によって覆い隠された「文字文明」ではなからうか。したがって漢字の字源と解釈は、伝統的な西洋の漢字使用に対する東洋民族への誤解を正すのに有効な方法だと言える。また言い換えれば、東洋主義の再構築 (reorientalism) の有効な方法でもあり、東洋文字中心文明を理解するための重要な道筋である。

注

- (1) 本研究は、大韓民国教育部及び韓国研究財団 (NRF) の助成を受けている。(NRF-2018S1A6A3A02043693)
- (2) 劉長林『中国系統思維』(中国社会科学出版社, 1990), 「序言」, p. 4を参照。
- (3) 張光直『考古学專題六講』(台湾: 稻鄉出版社, 1988), p. 18を参照。
- (4) 部分的な内容はすでに『中央月刊』2018年01号 (2017年12月) (<http://jmagazine-joins.com/monthly/view/319340>) で発表している。これは「東洋文化を解釈するための24の核心漢字」の論考のひとつである。この一連

の研究は、24の核心漢字の字源および字義の変遷過程を、西洋文化との比較を通じて、その背後にある文化的な差異を分析し、東西文化の異なる根源を探索している。

- (5) Georg. W. F. Hegel, 「China」 in *The Philosophy of History* (2001), pp. 132-155.
- (6) Georg. W. F. Hegel, 「China」 in *The Philosophy of History* (2001), pp. 132-155.
- (7) たくとえひな Chad Hansen, 「Chinese Language, Chinese Philosophy and Truth」 (1985), p. 504; Donald J. Munro, *The Concept of Man in Ancient China* (2001), p. 55; A. C. Graham, 「Chuang Tzu's Essay on Seeing Things as Equal」 (1969～1970), p. 39 がある。
- (8) 臧克和、劉本才(編)『実用説文解字』(上海古籍出版社, 2012)を参照。
- (9) 何琳儀『戦国文字字典』(1998), pp. 1114-1115を参照。
- (10) 「真」が「貞」字を来源とすることについては、筆者はすでに詳細に論証している。『貞真同源考』、『中国文字研究』, 2014, 19 (1), pp. 104-116を参照。
- (11) 筆者はかつて「真」と「貞」の関係について考証している。詳細は河永三『漢字与 *Scripture*』(Acenet' 2011)' pp. 133～148を参照。
- (12) 甲骨文における貞人の役割については、河永三『漢字与 *Scripture*』(Acenet' 2011)' pp. 149～158を参照。
- (13) 潘德荣『文字・詮釋・伝統——中国詮釋傳統的現代轉化』(上海訳文出版社, 2003), p. 26°
- (14) 潘德荣前掲書, p. 15°
- (15) Aristotle, *Metaphysics*, book 4, chap 7, 1011b25.
- (16) Searle, J. R., 1995, *The Construction of Social Reality*. New York: The Free Press, Chapter 9.
- (17) Martin Heidegger, *The Essence of Truth: On Plato's Cave Allegory and Theatletus* (2005) .-.타미린 하오메자, 『聖古聖可 存在論』, 『고대사』 1』(2005), 21호 聖古聖可, pp. 319-20 参照。
- (18) このほかに、G. Bernini, 『フランシスコ・ゴヤ』(1797-1800)、『プリュドン』(1799)、『ルノートル・ジャン・レフェヴル』(1870)、『キム』(1898)等の作品がある。
- (19) Haun Saussy, 「Outside the Parenthesis (Those People Were a Kind of Solution)」 *MLN*, vol. 115 no. 5, 2000, pp. 849-891.
- (20) これは一連の「東洋文化を解釈するための24の核心漢字」の文章の1

部分であり、すでに『中央月刊』2018年02号(2018年01月) (<http://magazine.joins.com/monthly/view/319782>) にて発表したものである。

- (21) 郭沫若『卜辞通纂』。
- (22) 白川静『字統』p. 759' 許進雄『中国古代社会』(韓文版) pp. 368-369 に見える。
- (23) 鄭樵『六書略』。徐中舒『甲骨文字典』「告」字条。郭沫若『積解言』、『甲骨文字研究』第一卷 pp. 89-102)・徐中舒『甲骨文字典』卷3・許進雄『中国古代社会』(韓文版)' p. 406。白川静『字統』p. 268 にそれぞれ見える。
- (24) 河永三前掲書『第二章「言与文: 言和文系列字」』pp. 38～75を参照。

(韓国・慶星大学教授、韓国漢字研究所所長)

